

ロックの力能概念について (III)

——神なるものの存在——

後 藤 愛 司

On the Concept of “Power” in John Locke’s 《An Essay concerning Human Understanding》, part III

——the Existence of a GOD——

Aiji Goto

1. 神の存在証明と力能

『人間知性論』第4巻10章は「神なるものの存在の私たちの真知について」と題されており、ここで、神の存在証明がなされている。このLockeの証明の仕方は、普通、Descartesの証明と同巧異曲だと評されている。しかし私は、むしろこの証明の中に、Lockeにおける超越的なものとのとらえ方の特色が示され、経験論が経験をこえる世界といかにかかわるかという人知の拡大における最大の問題が論じられていると思う。つまり、ここでは、『人間知性論』の主題である、人知の範囲、真知の成立する条件の探究は、あらかじめ設定された問題の範囲を越え、人間の経験知の外から現われてくる超経験的世界の实在性という新たな問題とかかわることになる。

この時、鍵となる概念は『力能』である。神の存在証明をめぐる、力能の真の意味がより明らかになると思われる。そこで、本稿では、Lockeの神の存在証明とそれに付随する諸問題を検討しながら、力能の持つ超越論的意味を考察する。

2. 神 の 観 念

A) Lockeの論ずる神はGodではなくa Godである。大槻春彦氏は「神なるもの」と訳している。これは、神なるものが多数あることを前提としており、それらのうちのある神について、もしくは、どの神においても共通するものを論ずるということであろう。つまり、キリスト教における唯一神を論ずるのではなく、広く神一般を問題にするということであろう。Lockeの神についての基本的考え方は、キリスト教の枠組からはずれているのである。彼は第1巻4章において、神の観念が生得でないことを論じ、その中で、様々な民俗誌を引用しながら、人が違えば、神の観念も様々であることをのべる¹⁾。その理由は神は複雑観念であり、単純観念の集成であるからである。

なぜなら、[神という]測り知れない至高な存有者について私たちのもつ観念を検討すれば見いだされようが、私

たちは、この観念を〔他の観念と〕同じやり方でもつのであり、神ならびに〔身体と〕別な諸霊について私たちのもつ複雑観念は、私たちが内省から受けとる単純観念から作られるのである²⁾。

神の観念が単純観念の集成であるとする、神なる観念の属性である、完全、無限、全知、全能、絶対、永遠などの観念は単純観念からなることになる。これらを、Lockeは感覚と内省からうけとった観念を無限にまで拡大することによって成立するとする。つまり、無限なるものは、有限なる単純観念の拡大によってうみだされるとするのである。第2巻17章は、この無限を論じた章である。この中で空間、持続、数、等の観念は、有限なる単純観念の反復・拡大する力能によって無限なる観念となりうるとされている。しかし、すべての観念が無限となりうるわけではなく、甘さや白さといった、拡大されても程度の差しかない観念は無限とならない。

これに対して私は答える。およそ部分をもつと考えられ、なにか等しい部分かそれより小さい部分かを足して増大できる観念はすべて、この反復によって私たちに無限の観念を供与する³⁾。

つまり、逆説的ながら、部分つまり有限なるものによって無限観念はえられるとするのである。これらの無限観念のうち空間の観念をとりあげてみよう。Lockeは、「空間の無限」と「無限なる空間」を区別する。

第一のもの(空間の無限)の観念は、心の好きなだけ反復された空間観念についての仮定的な終わりのない心の進行にすぎないが、無限空間の観念を心に現実にもつことは、終わらない反復が心にけって全体を表象できないような、反復された空間観念のすべてを、心がすでに通り越して現実に眺めることを想定し、だれにもわかる矛盾がその中にもちこまれているのである⁴⁾。

このことは、「数の無限」の観念と「無限数」についてもあてはまる。つまり、個々の部分的な観念は実定的(positive)であり、この実定的な観念の集積としての無限は実定的である。しかしながら、無限空間や無限数は実定的な観念ではない。私たちは、量の拡大としての無限にしる、分割の極限としての無限にしる、無限の実定的観念にまでいたらない。私たちが「自分の思惟の中で集積するものはすべて実定的で、空間もしくは持続の多数の実定観念の集団である。」⁵⁾したがって、感覚あるいは内省をとおしてもたらされる実定観念の拡大においてのみ無限はあり、これをこえるような実定的無限観念はない。

したがって、神の観念は実定的観念ではない。しかも「私たちの観念はいつも事物の存在の証拠であるとはかぎらない」⁶⁾のであるから、神という無限観念の存在は、神の存在の証明とはならない。

B) しかしながら、私たち人間は、神あるいは永遠、無限の観念を持っている。これに関してLockeは次のようにのべる。

およそ自分自身の存在あるいは他の存在を検討だけでもしようとするすべてのよく事物を考える理知的な被造物にとって、始めのない永遠の賢明な存有者という思念をもつことは避けがたいと、私は思う。そして、無限持続のこうした観念を私は確かにもっている。が、始めのこの否定はある実定的な事物の否定にほかならないから、この否定が無限の実定観念を私に与えることはまずない。私は、無限の実定観念へ思惟を及ぼす努力をする時、いつも途方にくれると告白し、無限の実定観念の明晰な了解をえることはすこしもできないと見いだすのである⁷⁾。

したがって、私たちは、否定的(negative)な観念としてしか無限をとらえられないのであり、このため、神の実定観念は、観念が私たちの経験つまり感覚と内省からのみ得られるとする前程のもとで

は、私たちの手のとどかないところにある。にもかかわらず、私たちが、神あるちは無限という観念を持つのは何故か、これが次の問題である。

C) これに対して、Locke は無限観念が次のような力能によって成立するという。内容的には無限数についてのべている部分である。

現実の無限数の実定観念を持っていると言うほどに不合理な者を見いだすことは困難だと私は思うが、その数の無限は、ただある単位集成を前のある数へいつも足す力能、それも思うままに長く多く足す力能だけに存する⁹⁾。

思うままに単純観念を加算し、拡大する力能、これによって私たちは無限の観念をもつ。しかし、この力能は、有限観念の集積としての実定性をのりこえられるであろうか。あるいは、否定的(negative)なものとしかおらえられない真の無限に実定性を与えられるであろうか。Locke の答えは否定的である。

それゆえ、無限に向かって私たちの実定観念をこえてあるものは、不明瞭 (Obscurity) のうちにあり、否定的観念の不確定な混乱をもっている⁹⁾。

以上のように、無限の観念が実定的でないとするれば、当然、無限者としての神の観念も実定的ではない。実定的でない神の観念から神の存在を導きだせないのは当然である。したがって、次には、実在の真理を Locke がどのように考えていたかを検討しなければならない。

3. 実在的真知

A) 『人間知性論』第4巻の前半部は、真知 (Knowledge) の分類、程度、範囲などを明確化することを目的としている。この場合、最も基本的な考え方は、真知は観念にのみかわり、観念間の一致あるいは不一致の知覚であるとする立場である。

およそ心は、そのあらゆる思惟と推理に当たって、心自身の観念のほかに直接の対象をなにももたず、観念だけを観想し、また観想できる。したがって、明白に、私たちの真知はただ観念にかかわるだけである。してみると、真知は私たちの観念のあるものの結合・一致あるいは不一致・背馳の知覚にはかならないように、私には思われる¹⁰⁾。

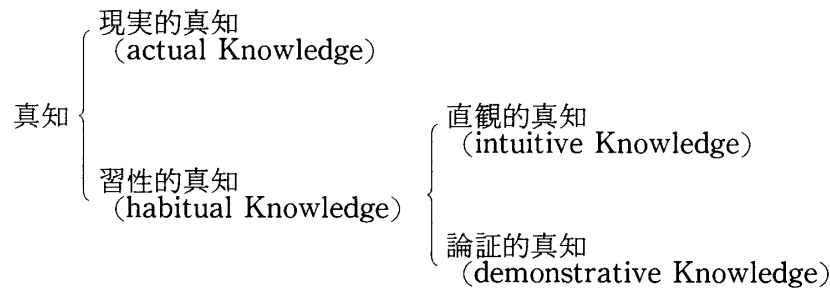
したがって、本来真知は、観念の対象としての実在にはかかわらない。ところが、この観念の一致あるいは不一致の問題を、Locke は次の四種類に分類する。

1. 同一性あるいは差異性 (Identity, or Diversity)
2. 関係 (Relation)
3. 共存あるいは必然的結合 (Co-existence, or necessary connexion)
4. 実在 (Real Existence)¹¹⁾

このうち、四番目の実在は、観念と観念の関係ではなく、「現実のある実在がある観念に一致する」というものである。したがって、神の存在の真知は、この第四番目、実在の一致の真知である。

「神在す」は実在の〔一致〕である¹²⁾。

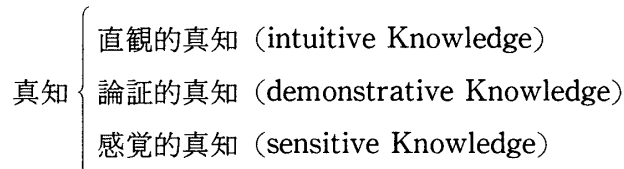
B) 次に、この実在と真知との関係を検討したい。Locke は真知を以下のように分類している。



現実的眞知とは、観念間の一致あるいは不一致を現にいま見ていることであり、習性的眞知とは、その一致あるいは不一致の記憶の確実性にもとづいているものである。後者は直観的と論証的に分かれる。直観的眞知は他のいかなる観念の介在も必要としないため絶対確実である。論証的なものは、直観的なものほど直接的にその一致あるいは不一致を知覚できない。それは論拠 (Proofs) という介在観念によるからである。したがって論証的眞知が確実であるためには、論拠による推論の諸段階に直観的明証が常に要請されることになる。

以上のような眞知の分類は、眞知は観念間の一致あるいは不一致であるとする立場には見事に相応している。しかし、実在との一致あるいは不一致としての眞知は、ここには含まれていない。

C) そこで、Locke はこの分類を修正しなくてはならない。まず、眞知の程度による分類として眞知を次の三つに分ける。



眞知の程度の三番目として新しく導入された感覚的眞知とは、個々の観念に対応する外部の対象の存在の問題であり、これは、明らかに実在の眞知のことである。これについて Locke は次のようにいう。

実を言うと、私達の外の有限な存者の個々の存在 (the particular existence of finite Beings) にたずさわる、心の別な知覚があって、この知覚は単なる蓋然性を超え、しかも前述の程度 (直観的と論証的眞知) の確実性のどちらにも完全には達しないが、眞知の名のもとに通用するのである¹³⁾。

しかし、私たちの持つ観念からそれに対応する事物の存在を眞知として知るのには、実は、観念の外部への超越であって、これを論証することはむづかしい。

Locke は、記憶や夢の中でうけとった観念と現実の感官を通してうけとった観念の違いは万人が明白に知っている論ずる。感官を通してうけとった観念の実在性が感覚対象の実在性を保証するのである。しかし、これは、Descartes の懐疑、特に夢の論理¹⁴⁾にはたえられそうもない。我々がある観念をうけとっている時、それが夢ではないという保証はどこにもないからである。

D) そこで、第4巻4章は、この問題をあつかうことになる。たとえば、Locke の立場に対する反論は以下のようなものである。

もし、すべての真知が私たち自身のもつ観念の一致あるいは不一致の知覚にのみ存することが真なら、狂信家の幻想と冷静な人間の推理とは等しく確実だろう。事物がどのようなものであるかは問題でない。そこで、人間は自分自身の想像の一致のみを観察し、それに合致して語る。それがすべて真理だ、すべて確実だ。こういった空中楼阁がエウクレイデスの論証と同じように、真理の強固なとりでだろう。(中略)だが、人々自身の想像のすべてこうした見事な真知は、事物の实在性を探究する人間にとってなんの役に立つか。人々の空想が何かは問題でない。事物の真知だけが貴ばれるべきだ¹⁵⁾。

こうした反論に対して、实在的真知つまり「私たちの観念と事物の实在の間に合致がある¹⁶⁾」真知として、二種の観念があるという。それは、「単純観念」と「実体の複雑観念を除くすべての複雑観念」である。

単純観念が实在的真知である理由は、心が単純観念を創作できないからである。

第一は単純観念で、これは、すでに明示しておいたように、心が自分自身にけって作れないから、必然的に事物の所産、すなわち、心へ自然な仕方で作用して、私たちの作り主の知恵と意志によって事物がそれに適応すべく定められている知覚をそこに産む事物の所産でなければならない¹⁷⁾。

したがって単純観念は空想の所産ではない。この場合、単純観念が事物の实在と結びつく根拠は何か。それは力能である。

このように、心にあるがままの白さあるいは苦さの観念は、それをそこ(心)に産むある物体にある力能に正確に応じているので、観念が私たちの外の事物ともてる、あるいはもつべき、いっさいの实在的な合致を持っている¹⁸⁾。

単純観念をいやおうなく私たちの心に産むつける力能を介して、事物の实在が証明されるとするのである。

一方、実体を除く複雑観念については、事物との一致がそもそも要請されない。その理由は次のとおりである。

これら(複雑観念)は、私が別の場所で明示しておいたように、心が自由に選んで、観念が自然にもつなにかの結合を考察せずに寄せ集めた観念集成である。それだからして、この種[の観念]ではすべて、観念自身が原型と考えられ、事物は、観念と合致するとして以外には考慮されないのである¹⁹⁾。

ここでは、単純観念の場合と、实在性の意味が違っている。複雑観念の一致する対象は、外的事物ではなく、心内における範型としての観念自身なのである。したがって、実体を除く複雑観念が外的対象と一致するかどうかという問題は、これらの複雑観念の組成要素である単純観念の实在性の問題に移行する。実体を除く複雑観念は、外的対象ではなく心の中の観念において、その实在性が根拠づけられるのである。この意味での实在性の上で、複雑観念としての数学的真知、道徳的真知の实在性が成立する。

E) ところが、実体の複雑観念は他の複雑観念とは違う性格のものである。つまり、実体は心が自由に作りだすものではないからである。

実体の私たちの観念は模写(Copies)と想定され、私たちの外の原型と関連させられるので、存在する事物あるいは存在した事物からいつも取られなければならない。それら(実体の観念)は、その観念が取られたものとある实在の範型(real pattern)なしに、私たちの思惟の勝手気ままに寄せ集められた観念から、たとえそうした集成に不整合を知覚できなくとも、組成されてはならないのである²⁰⁾。

この範型とは一次性質のことであろう。実体の複雑観念を構成する単純観念は、二次性質の観念で

ある。しかるに、この二次性質は実体の一次性質にもとづく。ところが、物体における力能を論じた際（『ロックの力能概念について(I)』第2章D）、のべたように、一次性質と二次性質の必然的結合は私たちには発見できず、これらを結合するものとして力能という概念が要請せられる。

二次性質の観念の実在性は、二次性質をうみだす力能を持つものとしての一次性質の実在性にもとづく、しかし、一次性質としてとらえられた事物の実在的本質は、すべてが私たちに明らかではなく、私たちは、その一部を実在的真知として知るのみである。そして、その一次性質の実在性を保証するものが一次性質をになう主体の力能なのであり、結局、力能を介してのみ、実体の実在性は保証せられることになる。したがって、感覚的真知としてとらえられた感覚対象としての実体の実在性は力能論的に確かであるとはいえず、その一次性質の全容は私たちにとって明らかにならない。この実在性は、力能あるものの実在性であり、私たちは二次性質をもたらす力能あるものとして第一次性質の実在を知る。しかし、すべての一次性質が私たちにもたらされるはずはない。とすれば、実体の実在性は、結局、不明瞭なままとどまるのであろうか。この時、Lockeは、感覚対象の存在することだけは否定できないとする。「ある事物の本性を理解できないからといって、その事物の存有を積極的に否定することは理に反する」²¹⁾からである。

4. 神の実在の論証

A) Lockeが実在的真知として認めるのは、次の三種類である。

私たちの真知の第四の種類、すなわち事物の実在的現実的存在という種類について、私たちは私たち自身の存在の直観的真知と、神なるものの存在の論証的真知をもち、その他のなにかの事物の存在については感覚的真知以外のものをもたず、これは私たちの感官に顕現する対象を越えて及ばない²²⁾。

このうち感覚的真知の実在性が力能論的に証明されることはすでに述べたので、まず最初に、私たち自身の存在の直観的真知を問題にしたい。これは一般に「心にかかると心がかかると現実に観念間の関係を知覚する」ような真知であって、他のどんな観念の介在も必要としないものである。すると、これは観念にのみかかわり、存在にはかかわらないはずである。ところが、「私たち自身の存在」という問題は、「私たちの観念」ではなく、「私たちの存在」にかかわる。この直観的真知は観念から存在への超越の問題を含んでいるのである。Lockeは次のようにいう。

私は考える、私は推理する、私は快苦を感じる。このどれも、私自身の存在より私に明白であることができるか。もし私が他のいっさいの事物を疑うとしても、その疑いそのものが私に私自身の存在を知覚させ、これを私に疑わせないだろう²³⁾。

この「私の存在」の証明はDescartesから学んだものであることはまちがいない。しかし、DescartesのCogito ergo sumは、いかにcogitoの内容が人間の全精神作用を含むものとして拡大解釈されようとも、「私がある」というときの私は精神としての私であり、否定的懐疑を徹底せんとする意志的精神の回心として自覚されるものである。つまり、私の存在の自覚とは、精神の能動的側面、すなわち意志的に思惟する私の自覚である。

B) ところが、Lockeの私の存在の自覚は二つの側面がある。一つは、先の引用にある「考える」「推

理する」という能動的思惟の存在からあらわれる直観である。もう一つは、「快苦を感じる」という感覚的受動を介しての直観である。先の引用は次のようにつづく。

というのは、もし私が苦を感じると知れば、私は、私の感じる苦の存在と同じように、私自身の存在の確実な知覚を明白にもつし、また、もし私が疑えば、私は、疑いと私の呼ぶ思惟と同じように、疑う事物の存在の確実な知覚を持つのである²⁴⁾。

あるいはまた、この「私の存在」証明を否定する者への反論として、この受苦性の問題をとりあげる。

もし自分自身の存在を否定するほど懐疑的だと称する者がいれば（というのは自分自身の存在を真実に疑うことは明々白々に不可能だ）、私の方は、飢えか他のある苦がその反対を堅く信じさせるまで、そういう人に無でいるお好みの幸福を享受させよう²⁵⁾。

したがって、私の存在は二重の意味で確実である。一つは Descartes と同じく、思惟する、意志する、疑う、という精神の能動性をになう思惟するもの、Locke のいう cogitative Being としての私の存在である。一方、快苦の受動を介してとらえられる私の存在がある。私たちは自らの意志によって自らに快苦をもたらすことができない以上、いやおうなく快苦を受けるのである。このとき、快苦をもたらす力能が私に存しない以上、それは快苦という知覚の対象からくる。これが事物の存在の感覚的真知であるが、これを真知と認めると同時に、我々は、快をうけるもの、苦をうけるものとしての私の存在を直観するにいたる。精神の外部から拘束する力能の受動者としての私の存在の自覚である。

C) 以上のごとく、直観的真知としての私の存在と、感覚的真知としての事物の存在は保証せられた。しかるに、神の存在の真知は論証的真知である。真知を観念の一致あるいは不一致にかかわるものとしてとらえれば、論証的真知は、直観的真知を基礎として、介在概念としての論拠を介して、推理によって、観念の一致あるいは不一致にいたるものである。

神という観念は単純観念ではなく、ましてや生得の観念ではない。であれば、神は複雑観念であり、複雑観念の真知は、その実在性に関しては、単純観念に基礎づけられねばならない。ここで問題となっているのは、神の観念の実在性ではなく、神の実在であるからである。

したがって、神の存在は、神の観念すなわち神の完全性からはでてこない。

いったい、人間が自分の心に形成できるもっとも完全な存所有者の観念がどこまで神なるものの存在を証明するかしないか、私はここで検討しようとしないうらう。(中略)けれども、こうは言えると私は考えるが、次のようなのは、この真理を確立し、無神論者を沈黙させる、下手なやり方だ。すなわち、[神の存在という]これほど重要な論題の全重点を「最完全者という」あのただ一つの根底に置いて、ある人々が自分の心に神のその観念をもつことを、(中略)神性者なるものの唯一の論拠とし、このお気に入りの案出を溺愛するあまり、他のいっさいの議論を捨て去り、あるいはすくなくとも、妥当でないとする努力をして、私たち自身の存在と宇宙の可感的部分とが私たちの思惟にきわめて明晰に力強く呈示するので、考察する人間はこれに逆らえないと私の見なす、そうした立証(proofs)を弱い、あるいは、謬りとして、この立証に耳を傾けるのを禁ずる、そういったやり方である²⁶⁾。

Locke は存在論的証明は認めない。さすれば、神の論証的真知は、観念の存在からではなく、実在的存在の真知から論証せられなければならない。この時、確実なるものとして私たちに与えられ

ているのは、直観的真知としての私の存在と感覚的真知としての事物の存在である。

この〔神の在す〕ことは、理知の発見するもっとも明瞭な真理であるが、またその明証は数学的絶対確実性に等しいが、それにもかかわらず、思惟と注意を必要とし、心は、これを私たちの直観的真知のある部分から規則正しく演繹するように専心しなければならない²⁷⁾。

この時、直観的真知としての私の存在が論証の原点となるのは、感覚的真知の程度が直観的真知に及ばないからである。

D) 我の存在を原点とする神の存在証明といえば、Descartes の人間学的証明が思いおこされる。Descartes は完全者という生得の観念の原因を最完全者の存在に求めている。しかし、Locke にとって、神の観念は生得ではないから、その原因は、人間の知覚する単純観念とそれを拡大する力能に求められるのみである。

したがって、先にのべた、我の存在を根拠づける二つの側面、人間の精神の能動性と感覚の受動性から、神の存在は証明されねばならない。

E) 次に、この存在証明を支える論理を問題にしよう。これは「無から有は生じない」という直観知である。

次に、人間は直観的な確実知によって、単なる無がなにか実在の存有者を産めないことは無が二直角に等しいことのできないのと同じだと、知る²⁸⁾。

原因は結果を形相的あるいは優勝的に含まねばならないとする伝統的な考えである。ただし、これは、Locke にとっては、公準 (Maxim) ではない。Locke の公準は観念間の一致あるいは不一致にかかわり、事物の存在にかかわらない。実在に関する公準はないのである。これは、心に最初に知られる真理ではない。何かを生むこと、何かを創造することは存在にかかわる力能であり、単純観念の量的拡大とは次元を異にする。したがって、この論理が認められれば、永遠なる事物があることは論証できる。

それゆえ、もし〔私たち自身という〕ある実在の存有者があり、非実有 (Non-entity) はどんな実在の存有者も産めないと、私たちが知れば、永遠からある事物があったと明白に論証される。というのは、永遠からいなかったものは始めをもったし、始めをもったものは他のある事物によって産みだされなければならないのである²⁹⁾。

先にのべたように、自己の存在はその能動的力能と受動的力能の故に、すでに直観的真知として確立されてある。しかるに、「我」は有限者、不完全者であって永遠から存在しているものではない。

つぎに、およそ存有と始め (its Being and Beginning) を他からえるものは、明白に、その存有のうちであり、存有に属するいっさいもまた、他からえなければならない³⁰⁾。

この「存有のうちであり、存有に属するいっさい」とは、人間の能動的、受動的力能に他ならない。

そのもつあらゆる力能は、同じ源泉に起因しなければならず、これから受けとったのである。してみれば、あらゆる存有者のこの永遠の源泉は、あらゆる力能の源泉・起源でもなければならぬ。したがって、この永遠な存有者は、もっとも力能あるもの (the most powerful) でなければならないのである³¹⁾。

これが Locke の神の存在証明である。すなわち、無から有は生じない。「我」は有である。この有は無から生じない以上、永遠なる有が起源として存在しなければならないというのである。

実はここには少々飛躍がある。有限者としての「我」の源泉が神なるものとして要請せられるとしても、それは私たちに力能を与え、私たちの存在に始まりを与える程度の力能あるものでありさえすればよいのであって、別に the most powerful である必要はない。more powerful でありさえすればよいのである。力能の優勝性が人間存在以上にあればよい。この存在証明はたしかに人間の限界からの超越の方向を示している。だからといって、完全者、全能者としての神の存在にいきつくかどうかは分からない。そこで Locke は、このような超越者の全能性、永遠性には固執しつつも、一抹の不安を示すかのように、次のように述べる。

こうして、私たち自身と私たちが自分自身の構造のうちに謬りなく見いだすものとの考察から、私たちの理知は次の確実で明白な真理、すなわちある永遠の、もっとも力能あり、もっとも知る存有者があるという真理の真知へと私たちを導く。だれかある人がこの存有者を神と呼びたがるかどうかは問題でない³²⁾。

Locke の証明したのは、人間存在を越えた存在、その力能において人間存在より優勝的な存有者が必要ならぬということである。

これを Locke が永遠の存有者があると断言する時、これは一方では、人間存在が、永遠なるものから切りはなされており、原理的に知りえない世界にとりかこまれていることを意味している。人間存在の限界の認識は、同時に、人間の限界を越えたもの、超越者の存在を認めることにつらなるということである。

F) さて、この永遠なる存有者、超越者は、いかなる存有者であろうか。この問題は二つの方向に発展させうる。一つは、人間の能動的力能としての思惟機能を超越するものとしての永遠者、つまり「永遠なる思惟者」である。他方は、人間の受苦性、受動的力能を持つものとしての人間存在から超越するものとしての「外的物質世界の永遠性」である。つまり永遠者は、物質的存有者であるか、思惟的存有者であるかという問題がおこる。

これに対する Locke の答えは、結論的には簡単である。思わない物質は思惟者を生みださないから、つまり、無から有は生じないから、永遠なる存有者は、思惟者でなければならぬとするのである。

かりにも単なる思わない物質が、ある思惟者、知能ある存有者を生みだすとは想定できず、その点は、あの無がそれ自身で物質を生みだすとは想定できないのと同じである³³⁾。

しかしながら、Locke は永遠なる存有者が物質的であるとする可能性をすてきれない。これは、神の存在証明の原点が、「我々自身の存在」の直観的真知であり、この真知は、前述したとおり、Descartes のような精神としての自己の存在のみではなかったからである。自己の存在の根拠たる能動的力能および受動的力能の二重性は、やはり、超越者の存在論証においても同じく、二重の影をおとすのである。だからこそ、Locke は第10章の後半13節から18節にかけて、永遠なる存有者が物質的であるとする仮定の正当性を検討しているのである。

5. 物質と思惟

A) 永遠なる存有者が物質的でありうるかという問題は、存有者 (Being) とは我々にとっていかなる

ものかという問題からはじまる。

人間の知りうる存有者は「思う存有者 (cogitative Beings)」と「思わない存有者 (incogitative Beings)」の二種類しかない。これは Descartes の二実体の Locke 的な表現である。そこで、問題は、思わない存有者つまり物質が思う存有者を産みだしうるかということになる。

B) 最初の問題は、思わない存有者である物質の規定性にかかわる。まず、物質には次の三種類のあり方が考えられる。

- ①単なる思わない物質。
- ②思わない物質にして、運動するもの。
- ③運動し、思う物質。

①の場合、「物質は自分自身の力量では自分自身のうちに運動さえ産めない。」³⁴⁾もし、物質が単なる思わない物質にすぎないとすれば、運動は他から、「物質より力能ある他のある存有者」³⁵⁾によってもたらされたものとなる。したがって、物質を永遠なるものとするためには、物質のもつ運動も永遠なるものとする他ない。そこで②の場合が成立する。

しかし、運動する物質を考えてみても、思惟や知識は、そこから産みだされない。運動する物質の間の関係は、力学的な作用、反作用の集成でしかないからである。

もし運動のない単なる永遠の物質を想定すれば、運動はけっしてあり始めるはずがない。もし最初のもしくは永遠の物質と運動だけを想定すれば、思惟はけっしてあり始めるはずがない³⁶⁾。

そこで③の仮能性しかのこらなくなる。

物質は運動を伴うにせよ伴わないにせよ、本源的にはそれ自身のうちに、また、それ自身から、感覚・知覚・知識を産めたとは想定できず、その点は、もしそうだとすると、感覚・知覚・知識は物質およびそのすべての分子と永遠に分離できない特性でなければならないことから明白なおりである³⁷⁾。

以上のようにして、Locke は、物質が永遠者であるとすれば、それは運動と思惟を持つ物質でなければならないとする。ところが、この場合、物質は単一ではなく、無数の物質が存在する以上、無限数の永遠者が存在することになりこれらの永遠者は相互に独立であるから、秩序と調和はこれらの永遠者の中から生まれることはない。したがってこの無限数の永遠なる物質に秩序をもたらしさらに上位の永遠なる存有者が要請せられる。この、自然のうちに秩序と調和と美をもたらし存有者は、物質を越えた思惟する存有者であるとするのである。どのように考えようと、物質を永遠なる存有者とすることができないというのが結論である。

しかし、物質が永遠者であるためには、思惟が物質に帰属しなければならないとする点は再考に値する。

C) この思惟と物質の結合関係をめぐって、物質世界のあり方には、次の三つの場合が考えられる。いいかえれば、思考は次の三つのいずれかの仕方でも物質に付属する。

- ①すべての物質分子が思考する。

②物質の一つの分子のみが思考する。

③適正に寄せ集められた物質の一定の体系が思考する。

①の場合、前にのべたとおり、物質の多数性は思惟する永遠なる存有者を多数とすることになり、この多数者を統制し秩序化する存在がなければならぬ。これは思惟するものである。

②の場合、他の大多数の分子は思考しないのであるから、その一つの分子が、「その力能に満ちた思惟あるいは意志」によって、残りの分子を創造したことになる。これでは、思惟が物質に優先することを逆に証明してしまう。

③の場合、物質は運動するものでなければならない。運動しない物質の体系は思考を産みだすはずがないからである。この運動する個々の分子には思惟は付属しないから、この物質の体系は「盲目的物質の偶然で指導されない運動」³⁸⁾でしかなく、この運動から思惟が生まれることは困難である。個々の物質分子が他の物質分子を規制する力能が偶然的にしか働かない場合、諸分子の集まった体系が、その体系全体の運動を規制する力能を、その体系自身から産みだすことはできないからである。体系を統制し秩序化するものは、その体系より上位の規制能力、秩序化能力をそなえたものでなければならない。

このようにして、Locke は永遠なる存有者が物質的である可能性を否定する。すると永遠なる存有者は、人間の精神に始めと存有を与えたものとしての精神的力能の中からもとめざるをえない。すなわち、永遠なる存有者は物質を超越した存在としての永遠なる精神として確立されることになる。

D) 以上のように、Locke は物質の思惟する可能性を否定する。私は、この結論そのものよりも、これにいたる推論の過程の中でなされる物質の存在様式の分析の中にこそ、Locke 独自の注目すべき見解が含まれていると思う。

それは物質の存在様式に階層を認める考え方である。たとえば、物質の現定性にかかわる三つの場合をとりあげてみよう。単なる思わない物質、運動する思わない物質、思う運動する物質の三種類は、並列的に物質のあり方をのべたものではない。この場合、前者より後者の方がレベルが高い。つまり、物質の存在様式に一種の階層性が考えられている。最も下位のレベルに思考せず運動しない物質を想定し、上位に思考する物質を考えるわけである。

あるいは、また物質が思惟すると想定される三つの場合のうちの三番目、適正に集められた物質の一定の体系が思考する場合を考えてみても、個々の運動する物質分子のレベルと、物質分子の集合としての思惟する体系は、二つの異なるレベルとされている。

このように、階層性を導入することで Locke がいいたいのは、下位レベルから上位レベルが産みだされることを論理的に証明できないということである。常にあるレベルはそれより上位のレベルによって規制されており、この規制する力は、下位のレベルにとっては、未知なる外部からの力としてしか認められず、この力の根源を追求することによって全能なる永遠の存有者の存在を証明しようとするのである。

E) この問題は、今日でも未解決のまま残されているように思われる。たとえば、私たちは生物の無生物からの発生や進化を、事実としては、知っている。それは化石として残された証拠にもとづく。しかし、アミノ酸がどれほど多量に存在しようと、それらが自ら一つの単細胞生物になること、単細胞生物が自ら多細胞生物になることを論理的に証明できない。下位のレベルの物質存在のあり方を規制する力は、そのレベルの物質をいかに分析しようとも、発見されないからである。最も単純化して言えば、無から有は生じないという論理は打ち消しがたいからである。にもかかわらず、事実として、生命は進化しており、物質存在としての人間は思惟している。つまり、事実として、下位のレベルの存在を規制する力能が存在することだけは否定できない。この力能は、常に下位レベルを規制しながら、階層的に上昇し、最終的には、全存在のレベルを統合的に規制する永遠なる存有者に属するものとされざるをえないのである。

6. 力能と未知なる世界

A) Locke は、力能を介して、超越的存在があることを証明した。しかしこの力能をもつ存在は、私たちに未知なるものとしてしかとらえられない。

Locke の分析方法である Historical plain Method は、観念の世界を記述するにあたって、単純観念を出発点としていた。人間が、経験と内省によって心の中にうけとるのは、単純観念であり、単純観念の結合、集積によって複雑観念が成立する以上、真知の根源は単純観念のあり方に求めざるをえないからである。ところが、単純観念は複雑観念よりレベルが低いから、複雑観念が成立するためには、単純観念を統制する上位レベルの力能が必要である。単純観念が自らを規制する力能を内在的に持っているとは考えられないからである。複雑観念は、実体の複雑観念をのぞいて、自らを原形として、心の中で成立する。この成立の仕方は、偶然的ではない。心は論理的に整合しないような観念の集成をゆるさないからである。すると、論理的で整合的な複雑観念が、数学や道徳におけるように実在的真知として成立するためには、その論理性を貫徹させるより上位のレベルの力能がなければならない。ここに、私たちの精神活動を規制する超越者の存在を認めなければならない理由がある。

B) つぎに、私たちが実在的真知として知りうるのは、単純観念と実体をのぞく複雑観念だけである。実体の複雑観念の大部分は蓋然知にすぎず、私達は、本来真知として確認できない未知の実体によってかこまれている。私たちのまわりの世界を構成する諸実体の実相は、それが蓋然知であるかぎり、永遠に実在的真知とはならない。しかし、私たちは、物質的存在のあるレベルを規制する力能をとおして、私たちの知りえない世界が存在することを認めざるをえない。知りえない世界は存在しないのではない。私たちの観念の世界は、常にその未知なる世界から出現してくる力能によって規制され、方向づけられているのだから。

この未知なる力能を、現在、私たちは神の力能とは呼ばないかもしれない。しかし、Locke は人間の知りうる世界の限界を探究する中で、逆に、知りえない世界が、その力能をとおして、私たちに自らの存在を示してくることを確信していたようである。この力能を彼は神の存在の証拠と考えたので

ある。

無限な存有者の作用を了解できないからといって、その力能を否定することは理にかなわない³⁹⁾。

注

1) 『人間知性論』第1巻4章§15~§17

2) 『人間知性論』第2巻23章§33 (以下II, 23, §33と表記)

参照した英文は『An Essay Concerning Human Understanding』edited by Peter H. Nidditch, Oxford, 1975であり、ページはそれによる。()内は岩波文庫、(大概春彦訳)の巻数ページ数である。本文中の引用は大部分大概訳によるが、文脈上あらためた部分もある。したがって注2はII, 23, §33, p. 314 (II, p. 275~276)となる。

3) *ibid.* II, 17, § 6, p. 212 (II, p. 90)

4) *ibid.* II, 17, § 7, p. 213~214 (II, p. 92)

5) *ibid.* II, 17, §15, p. 217~218 (II, p. 98~p. 99)

6) *ibid.* II, 17, § 4, p. 211 (II, p. 87)

7) *ibid.* II, 17, §17, p. 219~220 (II, p. 102)

8) *ibid.* II, 17, §13, p. 216 (II, p. 97)

9) *ibid.* II, 17, §15, p. 218 (II, p. 100)

10) *ibid.* IV, 1, § 1, § 2, p. 525 (IV, p. 7)

11) *ibid.* IV, 1, § 3, p. 525 (IV, p. 8)

12) *ibid.* IV, 1, § 7, p. 527 (IV, p. 11)

13) *ibid.* IV, 2, §14, p. 537 (IV, p. 27)

14) 『省察一』

15) *ibid.* IV, 4, § 1, p. 563 (IV, p. 72~73)

16) *ibid.* IV, 4, § 3, p. 563 (IV, p. 74)

17) *ibid.* IV, 4, § 4, p. 563~564 (IV, p. 74)

18) *ibid.* IV, 4, § 4, p. 564 (IV, p. 74~75)

19) *ibid.* IV, 4, § 5, p. 564 (IV, p. 75~76)

20) *ibid.* IV, 4, §12, p. 568 (IV, p. 82)

21) *ibid.* IV, 3, § 5, p. 543 (IV, p. 38)

22) *ibid.* IV, 3, §21, p. 552~553 (IV, p. 55)

23) *ibid.* IV, 9, § 3, p. 618 (IV, p. 173)

24) *ibid.* IV, 9, § 3, p. 618 (IV, p. 173)

25) *ibid.* IV, 10, § 2, p. 619~620 (IV, p. 175)

26) *ibid.* IV, 10, § 7, p. 621~622 (IV, p. 179~180)

27) *ibid.* IV, 10, § 1, p. 619 (IV, p. 174)

28) *ibid.* IV, 10, § 3, p. 620 (IV, p. 176)

29) *ibid.* IV, 10, § 3, p. 620 (IV, p. 176)

30) *ibid.* IV, 10, § 4, p. 620 (IV, p. 176)

31) *ibid.* IV, 10, § 4, p. 620 (IV, p. 176)

32) *ibid.* IV, 10, § 6, p. 621 (IV, p. 177)

33) *ibid.* IV, 10, §10, p. 623 (IV, p. 181)

34) *ibid.* IV, 10, §10, p. 623 (IV, p. 182)

35) *ibid.* IV, 10, §10, p. 623 (IV, p. 182)

36) *ibid.* IV, 10, §10, p. 624 (IV, p. 183)

37) *ibid.* IV, 10, §10, p. 624 (IV, p. 183)

38) *ibid.* IV, 10, §17, p. 627 (IV, p. 190)

39) *ibid.* IV, 10, §19, p. 629 (IV, p. 193)

(1985年10月31日受理)